



勇者「王様チーッス。勇者ですよーっと」

王様「だ、誰だ！？」

勇者「いやだから勇者だって。ほれ勇者の印」ぺかー

王様「それは確かに勇者のみが持つ……ああ、すみませぬ。あまりにもその……最後にお顔を見た時より、容姿がお変わりになってて」

勇者「あー、痩せたしね。ヒゲとかも生えてるし。何より格好がこ汚いよな。鎧とかドロドロだし臭いし」

王様「い、いえ。決してそのような……」

勇者「おー、そういや、あん時はどーもー」

王様「こ、こちらこそ……あの時は……」

勇者「無理しなくてもいいって。っと、ごめんちょっと吸わせてもらっていい？」

王様「は？ あ、ああ、葉巻ですか？ では兵に良い物を用意させましょう」

勇者「いいよいいよ。自分のあるし」

王様「そうですか。ところでその……他の皆様は？」

勇者「んー、戦士と魔法使いと僧侶の事？」

王様「はい。お仲間方はご一緒ではないのですか？ もしや皆様あちらに？」

勇者「死んだよ。俺以外は全員」プハー

王様「え？」

勇者「……………」ス…………フハー

王様「……この度は……誠にその……」

勇者「あー、そういうのいいっていいって」

王様「ですが……なぜ皆様は、その、お亡くなりにな？」

勇者「ほんじゃその辺りも含めて、メシでも食いながら説明しようか。正直、俺ハラ減って死にそうなんだわ」ぐきゅるる～

王様「も、申し訳ございません！ 誰ぞ！ 誰ぞあるか！ 勇者様の凱旋じゃ！ 宴を開け！！」

兵士「ハハッ！」

勇者「……………」フハー

宴の場

勇者「うめえうめえうめえ」がッがッがッ

姫様「まあ、勇者様は健啖ですね」

勇者「この商売、食えるときに食っとかないとねー」がッがッがッ

姫様「勇者様、こちらの品も美味しゅうございますわよ」

勇者「へー。どれどれ……お、ほんとだうめえ」がッがッがッ

姫様「あらあら。お食事は逃げませんわよ？」

勇者「……んなこたねえよ」

姫様「え？」

勇者「……………」がッがッがッ

王様「おお、こちらにいらっしゃったか勇者様。おや？ 姫もこちらにいたか」

姫様「はいお父様。勇者様ったら、わたくしとのお話よりも、お食事のほうが楽しいようで。まさか豚の丸焼きに嫉妬するとは思いませんでしたわ」

王様「はっはっは。きっと勇者様も照れているのだよ。姫の美しさに」

姫様「まあ。そうなんですの勇者様？」

勇者「あー、そうっすね。そうだと思いますはい」がッがッがッ

王様「ところで勇者様、そろそろ魔王討伐までのお話などをいただければと思います」

勇者「んー、そうね。ハラもそこそこ落ち着いたし」

王様「できれば、お仲間方の勇敢なる最後なども聞かせていただければと」

勇者「へいへい。そんじゃ行きますかね」

姫様「期待しております勇者様」

勇者「うーっす」

壇上

勇者「えー、どうも勇者です」

ザワザワ

「おお、あれが……」

「憎き魔王を……」

「英雄だ」

ザワザワ

勇者「そんじゃあどっから話しますかね。んー、そうね。食べ物話でもするか」

王様「ゆ、勇者様！？」

勇者「ん？ どしたの？」

王様「で、できれば冒険のお話を……」

勇者「メシだって冒険の一部だよ。嫌ならメシ食いに戻るぞ俺」

王様「も、申し訳ありません。続けてください」

勇者「うーい。えーっと、皆さん、今日は美味しい物いっぱいありますよね。俺もさっきから驚きっぱなしなぐらい美味しいものばっかです」

勇者「こんな美味しい物食ったのは、多分半年ぶりぐらいです」

勇者「じゃあ普段は何を食ってたんだって話ですが、皆さんは街の周りにいるあばれイモムシとか、どくウサギとか食ったことありますか？」

ザワザワ

勇者「ははは、ないっすよねえ。下ごしらえ大変だし、大変な割には美味くもないし。何より、そいつらは魔物だし」

勇者「えー、ですが、牛や豚や鶏や、畑で採れる野菜なんてのは人間が飼ってたり作ったりしたものでして」

勇者「そして俺や仲間は魔族が支配してた土地なんかも冒険していた訳で」

勇者「なあ王様」

王様「は、はい」

勇者「この世界に、人間の国や街や村が大体どれくらいあるか把握してる？」

王様「え、ええ。大きい国は5つ。街や村で考えると……30は無いかと」

勇者「ふむ。その中で、魔王の居城の近くにある街や村の数は？」

王様「……0ではないかと。あっても魔王に支配されているか、滅ぼされているかと思われます」

勇者「よくできました。勇者マークあげちゃいます」

王様「い、いやその……どうも」

勇者「さてさて皆さん、こんな感じで基本的に魔王の城に近づくにつれ、街や村は減っていきます。更に、数少ない街や村は基本的に貧困に喘いでます」

勇者「そんな状態で俺達が誰にはばかることなく食べる事ができた物とは……はい姫様、答えをどうぞ」

姫様「魔物……」

勇者「はいよくできましたー。勇者マーク進呈！ やったね！」

勇者「でだ。この辺りにいる魔物、つまりはあばれイモムシとかどくウサギみたいな奴らね。あいつらは、気性が荒いとはいえ、動物とそんなに変わりません」

勇者「ですが、魔王の城に近づくにつれ、魔物ってのは変化していきます」

勇者「では王様、第二問！ その変化というのは？」

王様「……………わかりませぬ」

勇者「ブブー！ はっずれー。勇者マークはおあずけー」

王様「……………」

勇者「その変化ってのはね、あいつら、知能が上がっていくんだよ」

勇者「知能が上がるってのは、感情が激しく出たり、言葉を喋ったりって感じで表れてくる」

勇者「泣きながら攻撃してきた奴を、『殺さないで』と懇願してきた奴を食って俺達は生きてきた」

勇者「人食いとなんら変わりねえ。それがあんたらの言う勇者って存在だ」

王様「……………」

姫様「……………」

勇者「おっと、湿っぽくなっちゃったね。えー、話題を変えますか」

勇者「そろそろ、我らが誇る仲間たちの話でもするかな」

ザワザワ

「確か戦死されたと……」

「先程の勇者様が言われたような思いをしてまで勇敢に……」

「おお……実に誇らしい……」

ザワザワ

勇者「えー、じゃあ死んでいった順番に話しましょうかね。っと、ここで姫様に第二問！」

姫様「えっ！？ あ、ええと」

勇者「一番最初に死んだのはズバリ誰！？」

姫様「……っ！！ ふ、ふざけないでください勇者様！ そのように死者を愚弄するのは……！」

勇者「いいから答えろ」

姫様「ヒッ！ ……で、では、魔法使いどの……？」

勇者「なるほどー、確かに見た目も中身も温室育ちの箱入りお嬢様だったしねー。体力もなかったし、魔物食う時も一番ギャーギャー泣きわめいたのもあいつだ」

姫様「……………」

勇者「でもはっずれー。正解は…………ぱんぱかぱーん！ 戦士で一す！」

姫様「せ、戦士どのですか！？ そんな、あの方はこの国一の怪力で、身体も心もとてもお強い方でしたのに！」

勇者「うん、そうだね。あいつは強かったよ。俺らみたいに魔法が使えないからって、いっつも真っ先に魔物に突っ込んで体を張って頑張った」

勇者「だから真っ先に死んだ」

姫様「では、魔物の手によって……」

勇者「違うよ。第一、魔物にやられたんなら蘇生できるでしょ教会とかで」

姫様「確かに……それでは、戦士どのはいったいなんで……？」

勇者「俺が殺した。あいつに頼まれてな」

姫様「な！？」

ザワザワ

勇者「……………」

姫様「もしや戦士どのは、魔王に操られ……？」

勇者「いんや違うよ。自分の意志で俺に『殺してくれ』と頼んだ。だから殺した」

姫様「なぜ！？　なぜそのような！？」

勇者「じゃあその辺も踏まえて話しましょうかね」

勇者「さっき話したように、戦士は真っ先に魔物に突っ込んでいく事を選んだ」

勇者「なので、誰よりも身体に傷を負った」

勇者「だから、誰よりも回復の魔法を受け、誰よりも回復の薬を使った」

勇者「結果、あいつは中毒になったんだ」

姫様「……中毒？」

勇者「あー、馴染みないか。そりゃまあ、回復魔法もこの辺りの薬草も中毒性は低いしなあ」

勇者「中毒ってのは、それがないと駄目な状態と考えててくれ」

勇者「さてさて、皆さんはこれをご存知ですか？」 ちゃぽん

王様「そのビンの中にあるのは一体？」

勇者「だよーねー。見たことないよね。これは、魔王城近辺に生えてる特殊な薬草を煮出して凝縮させた、超回復薬だよ」

勇者「こいつは凄いよ。例えば、腕が吹っ飛んだとしても傷口から再生しちゃう。ポコポコーって。トカゲかってーのって感じ」

王様「そのような薬が……」

勇者「まあ、死んでさえなけりゃあこれで治るよ。……身体はね」

勇者「でも、精神はそうはいかない」

姫様「精神……？」

勇者「そう精神。心ともいうかな。そこがね、壊れてくるの」

勇者「この薬はよく効く反面、とても強いんだ。強くて強くて、心をズタボロにできるぐらいに」

勇者「一口飲むと、激しい高揚感で何でも出来そうになる。実際、傷が治っちゃう訳だし」

勇者「でも、飲んで一時間後ぐらいかな。その辺りから副作用が出始める」

勇者「幻覚が見えてきたり、体の筋肉が弛緩したり、訳のわからないことを叫んだり、身体の中を虫が這いずり回ってるように感じたり」

勇者「そういう状態が半日ぐらい続くんだ」

勇者「だけど、そんな状態で魔物に襲われでもしたら一巻の終わりだ」

勇者「だから、こいつの副作用が出始めた頃に、精神を落ち着ける魔法をかけてもらうか、薄くした超回復薬をまた飲んでだま시다ましやっていく」

勇者「そんな事を続けていった結果、戦士はどうしようもないぐらいに心が壊れちゃった」

姫様「そうになってしまう前に、安全な場所に戻って養生することはできなかったのですか！？」

勇者「あー、俺が帰ってくる時に使った移動魔法ね。まあ確かに、あれを使えば一瞬でここには戻れたな」

姫様「だったら！」

勇者「でも却下だ」

姫様「何故！？」

勇者「移動魔法ってのは、移動先が限定されている」

勇者「この城にもあるよね？ 移動魔法用の魔方陣」

勇者「だからここには戻れる」

姫様「戻れるのなら何故！？」

勇者「じゃあ戻った後は？」

姫様「……は？ 後といいますと？」

勇者「戻った後、養生して、すっかりよくなった後だよ」

姫様「それは……また魔王を倒すために……」

勇者「どうやって行くの？」

姫様「そ、それは移動魔法で……」

勇者「魔王の支配力が強い場所へ？ 魔方阵も無いのに？ どうやって？」

姫様「……………」

勇者「っと、いじめすぎちゃった。ごめんね。まあ、この辺りならね、姫様の案でも悪くないのよ」

勇者「でも、24時間どんな時に凶悪な魔物に襲われるかわからないような場所で。更には先に何があるかもわからない場所ではそうはいかないんだ」

勇者「魔物を殺して薬を飲んで、魔物を食ってまた殺して。傷ついて癒してまた傷ついて」

勇者「戦士はさ、薬の副作用で髪の毛なんてぜーんぶ抜けちゃってさ」

勇者「まあ俺ほどとは言えないまでも、それなりにハンサムだった顔とかもどんどん変わっちゃってさ」

勇者「笑うと糸みたいになって、見てるこっちが笑っちゃうような目も、常にぎょろぎょろしてギラギラしてるようになってさ」

勇者「俺に冗談を言っではでっかい声で笑ってた口も、半開きでよだれ垂らして、ずーっとブツブツ言ってるようになってさ」

勇者「武器も鎧も盾も兜も、魔物の血で常に真っ赤でさ」

勇者「どっちが魔物なのか、わからなかった」

姫様「……………」

勇者「でさ、魔王の直下にあたる四天王の一人を倒した時、腕も足も片目も吹っ飛んで、内臓なんかでろーっと見えてる状態であいつ言ったんだ」

勇者「『殺してくれ』ってさ」

勇者「当然、みんな断ったよ。魔法使いなんて、普段は戦士と喧嘩ばっかしてたのに、すげえ泣いてんの」

勇者「涙と自分の傷から出た血でべちゃべちゃな顔でさ」

勇者「『あたしを置いて行かないでくれ』とか『約束したじゃないか』とかさ」

勇者「そしたらさ、戦士ぶるぶる震えながら、片方残った目を糸目にして、少し困ったようにさ」

勇者「『ごめんな』って言ってさ」

勇者「あいつら、きっと両思いだったんじゃないかなあ」

勇者「そんで、あいつ俺に『頼む』って言ってさ」

勇者「だから殺した」

姫様「ゆ、勇者様は悪くは……」

勇者「あー、そういうのどうでもいいのよ。ただ、俺が戦士を殺したって事は事実な訳で。それはどうしようもない現実な訳で」

姫様「でも……でもそんなのって……」

勇者「悲しすぎますーって感じかな？　ありがとねー。お礼に勇者マークしんてー」

勇者「多分さ、戦士はもう限界だったんだと思うよ」

勇者「最後こそちゃんと喋れたけど、その前なんて『うー』とか『あー』しか言えなくなってたし」

勇者「何度も俺たちを魔物と間違えて攻撃しようとしちゃってたし」

勇者「魔法使いにさ、攻撃しようとしちゃったし」

勇者「ギリギリで気付いて、泣きながら壁にガンガン頭ぶついたりしてさ」

勇者「みんなが止めても言うこと聞かなくて困っちゃったよ」

勇者「長くなっちゃったね。戦士の話はこんなところかな」

勇者「次は、魔法使いの話だ」

勇者「さて、魔法使いの死因だけど。よし、じゃあ王様！ 魔法使いはなんで死んじゃったでしょー！」

王様「ま、魔物にやられ……」

勇者「ブブー！ ふせいかーい！ 答えはー……」

姫様「……自殺ではないでしょうか」

勇者「おお、凄いね姫様。だいせいかーい！ 勇者マーク進呈！ 拍手っ！」

シーン

勇者「なんだよもう。ノリ悪いなあみんな。まあいっか。それで姫様、どうして自殺だと思った？」

姫様「魔法使いどのが戦士どのを愛されていたとすれば、愛する殿方が居ない世なればいっそ……」

勇者「なるほどなー。うん、それも一つの理由だろうね」

姫様「では、他に理由があると？」

勇者「さあ？ どうだろね」

姫様「はぐらかさないで下さい！」

勇者「だってさ、本当にわからないんだよ。わからなかったんだ俺達には」

勇者「戦士が死んでから、魔法使いは目に見てわかるほど変わったよ」

勇者「まあ、俺らみんな見た目なんて変わっちゃってたし、頭もどっかぶっ壊れてはいたんだけど」

勇者「でも、そういうんじゃないくて、魔法使いは……なんていうか、憎かったんだと思う」

王様「憎かった……魔王がでしょうか？」

勇者「魔王も含めてかな」

王様「魔王も含めて？」

勇者「うん。魔王も、魔物も、自分を置いて死んだ戦士も、戦士を救えなかった俺らも、自分も、きっと人間も」

姫様「そんな……」

勇者「きっと、全部全部憎くて憎くてたまんなかったんだと思う」

勇者「世界中が憎かったんだと思う」

勇者「魔法使いの魔法ってさ、結構えげつないのよ」

勇者「広範囲を爆破したり、でっかい炎で焼き尽くしたり、吹雪を呼んだりさ」

勇者「でも、そんなのは序の口でね」

勇者「あいつは戦士が死んでから、使う魔法なんかも変わったんだ。なんだと思う姫様？」

姫様「……魔法のことはよくわかりませぬ」

勇者「ですよー。普通に生活してたら、あんま馴染みないもんね攻撃魔法って」

勇者「えっとね、毒や酸の魔法をよく使うようになったんだ」

姫様「毒や酸ですか？」

勇者「うん。でね、ピンとこないかもしれないけれど、この魔法って凄いのよ」

勇者「まず酸だけど、魔法で造り出した強力な酸って、多分みんなが想像してるよりずっと怖い」

勇者「地面とか溶けちゃって穴が開いちゃうし、これを敵に当てたら……ね？」

王様「……………」ゴクリ

勇者「悲鳴がね、耳から離れないんだ」

勇者「腕が、足が、指が、目が、耳が溶けていく魔物の悲鳴」

勇者「最初に話したけど、魔王の城に近ければ近いほどに魔物の知能は上がっていく」

勇者「人の言葉でね、俺達の使う言葉でね、泣き叫ぶんだ」

勇者「魔物を食べるって話をしたじゃん？ あれはさ、ある意味、まだマシなのかもしれない」

勇者「だってさ、生きるためじゃん。食べないと死んじゃうから殺して食べる」

勇者「動物が動物を殺して食べる。世界の正しいあり方なのかもしれない」

勇者「だけど、魔法使いは違った」

勇者「苦しめたいから殺す。憎いから殺す。殺したいから殺す」

勇者「狂った殺人鬼のでっきあがりーってもんですよ」

姫様「う……ひっぐ……」

勇者「ありやま、泣いちゃった。まずいなー、俺フェミニストなのに。ごめんなー」

勇者「でだ。毒の魔法なんだけど」

勇者「こいつは酸の魔法なんかよりえげつなかった」

勇者「王様も姫様も、ここに集まったえらーい人達も、あんま知らないかもしれないけれど、魔物だって集落みたいなものを作ってるんだ」

王様「なんと……」

勇者「意外だった？ でもさ、知能は人並、下手したら人よりも知能があるかもしれない生き物が沢山いるわけよ」

勇者「それに、オスもいればメスもいる。それらがいるなら子供だってできる」

勇者「子供の魔物は当然大人なんかよりは弱い」

勇者「だから寄り集まって、集団生活をしたりする」

勇者「人となんら変わりはないよ」

勇者「魔法使いは、そんな集落で毒の魔法を使って回った」

勇者「正確には、集落の近くの河や、集落の中にある井戸水に」

勇者「当然、阿鼻叫喚の地獄絵図ですよ」

勇者「さっき言った通り、魔物にだってオスもいればメスもいる。子供もいれば年寄りもいる」

勇者「強いものも弱いものも混じって沢山いる」

勇者「そいつらを別け隔てなく、魔法使いは皆殺しにした」

勇者「そして、そんな地獄で魔法使いは笑ってた」

勇者「魔法使いってさ、さっきも話した通り、元々は箱入りのお嬢様なんだよね」

勇者「だから冒険に出た最初の頃は、笑い方も『オホホホホー』みたいな変な笑い方でさ」

勇者「そんな変な笑い方を見て、俺や戦士がちよっかい出して、真っ赤に怒った魔法使いを、困った顔で僧侶がなだめて」

勇者「そんな時もあったって……楽しかったなあ」

勇者「おっと、話が逸れた。駄目だね、思い出を話すと、紐づいて色んな思い出が溢れ出てくる」

勇者「でだ。集落での魔法使いは、お嬢様だとは思えない顔でゲタゲタ笑ってた」

勇者「とっくに狂ってたんだ」

勇者「そして、そんな彼女を見ても何も感じない俺も僧侶も」

勇者「とっくにみんな狂ってた」

勇者「血の海を見ながらゲタゲタ笑う魔法使いを他所に、俺達はのろのろと食料をあさってガツガツ貪り食っていた」

勇者「僧侶は泣いてたのかもしれない。俺も泣いてたのかもしれない」

勇者「魔法使いも泣いてたのかもしれない」

勇者「まあそんなのはどうでもよくてですねー」

勇者「そんな事を繰り返してたある日の夜、俺達は凄いものを見たんだ」

勇者「どこまでもどこまでも下へ続いているような崖があってね。その場所を渡ると魔王の城までもう少しって場所だ」

勇者「そこでキャンプをしていたら、テントの外で魔法使いがキャーキャー叫んでた」

勇者「狂ったような声じゃなくてさ、歳相応の女の子が、綺麗な服を見て騒ぐような、あの暖かい感じで」

勇者「気になった俺と僧侶がテントから出ると、空一面で星が流れてた」

勇者「流星群っていうの？ 偶然、見ることができたんだ」

勇者「つい数時間前まで、集落を潰して魔物の死体をザクザク切ったりして遊んでた魔法使いだけど」

勇者「この時だけは子供みたいにさ」

勇者「『すごいね』とか『綺麗』とか言っちゃってさ」

勇者「そんで、俺も僧侶もうなづいて、みんなで空をずっと眺めてた」

勇者「そしたら、魔法使いが言ったんだ」

勇者「『戦士にも見せたかったなー』って」

勇者「その辺の街中で、ふと言っちゃうような感じで。特別な感じでもなんでもなく言ったんだ」

勇者「次の日、魔法使いは居なくなってた」

勇者「崖の前に、魔法使いの杖と、これが置いてあった」

姫様「手紙……？ まさか遺書……？」

勇者「なのかなー？」

姫様「え？ 勇者様は中をご覧になってはいないのですか？」

勇者「いや見たよ？ 俺も僧侶も中身を確認した」

姫様「でしたら、遺書ではない……？ 中にいったい何が書かれてたのですか？」

勇者「見る？ ほいよ」

姫様「あ、ありがとうございます。それでは……………ヒッ！！ こ、これは！？」

勇者「あっはっは。わかんないっしょ？」

姫様「うっ……うげっ……ケホッケホッ！」

王様「ひ、姫！ 勇者様！ まさかこの書に呪いを！？」

勇者「いんや、呪いの類はかかってないよ。正確には、呪いは『もう』かかってないけど」

王様「ど、どういうことですか！」

勇者「まずその手紙、魔法使いの意思かそうじゃないのかわからんが、最初はとんでもない強烈な呪いがかかった」

勇者「俺でも近くにいるだけで意識がゴリゴリ削られるようなシロモノでさー。弱い人間や魔物なら、近くに寄っただけで死んじゃってたんじゃないかな」

勇者「んで、僧侶が必死になって呪いを解いたんだ」

勇者「そして、女の子の手紙だったのもあって僧侶が先に見ただけど、ショックで気絶しちゃってさ。丸一日は動けなかったねー」

王様「中にはいったい何が……」

勇者「ぐちゃぐちゃの血文字つつうか、血で描かれた絵」

勇者「一つだけわかるのは、魔法使いはこれを見た奴全員を呪ってるんだと思うってことだけかな」

勇者「あいつ、世界中がどこまで憎かったんだろうなー」

姫様「酷い……こんなの……こんな絵、人の描けるものじゃない」

王様「ひ、姫っ！」

勇者「姫様に全面的に同意だね。そんなもん描ける魔法使いも、それを見てもほとんど何も感じなくなった俺も、もうとっくに人じゃないんだろうなあ」

勇者「とまあ、魔法使いの話はこれでおしまい」

勇者「じゃあ最後。僧侶の話をはじめようか」

勇者「僧侶の死因については少し特殊なんで、問題は無しで。残念だけど勇者マークは諦めてね」

王様「……………」

姫様「……………」

勇者「さて、残りは俺と僧侶だけになった訳だけれど、結構大変だったのよこれが」

勇者「だってさ、戦力は1/2。しかも僧侶は戦闘職じゃない。そして、街に戻って仲間を集めてちゃ時間がどれだけあっても足りない」

勇者「なもんで、俺達は逃げながら魔王の城へ向かった」

勇者「勇者とバレないようにみすぼらしい格好をして、魔物を騙し討ちして、泥水をすすって、獣みたいになりながら向かった」

勇者「もう中毒とか気にしてられなかった。超回復薬だって、それ以上に強い薬だってガブガブ飲んだよ」

勇者「そうやって、ぐにゃぐにゃの景色を見ながら、何かの拍子にぶつり切れちゃいそうな意識ではあったけれど、俺も僧侶も魔王の城までどうにか生きて辿り着いた」

勇者「っと……」ぐらっ

王様「ゆ、勇者様！？ 大丈夫ですか！？」

勇者「あー、大丈夫大丈夫。ごめん、ちょっと失礼して一服」

勇者「……………」ス…………フ…………

王様「あの……勇者様、もしやその葉巻は……」

勇者「あー、うん。普通の葉巻じゃない。強い薬草と毒消し草を巻いて、煮詰めた聖水を染みこませた特別品」

王様「そんなものを……」

勇者「悪いね。でも、これ吸わないとさ、ほら」プルプル

王様「手が震えて……」

勇者「まあそういう事。ごめんねみなさん、もうちょっと待ってねー」プー

シーン

勇者「うし、んじゃ続き。さて、どうにか魔王の城まで辿り着いた俺達だけれど、ここで俺がとんでもないヘマをやった」

勇者「魔王の側近に俺がいることがバレちゃったんだ」

勇者「僧侶は運良く城の中で別行動をして情報を集めていたから大丈夫だったんだけど、俺はそうはいかなかった」

勇者「どうにか魔王の側近は倒した。腐っても勇者だしね俺」

勇者「でも、俺も死んじゃったんだ」

勇者「僧侶が見つけたとき、俺はつつうか、俺だったモノは指のかけらぐらいだったみたいだね」

勇者「普通、人が蘇生するためにはその人のパーツ、肉片でも灰でもいいんだけど、半分以上は欲しい。せめて 2/3 は欲しいってのが常識でしょ」

勇者「つまり俺の蘇生は絶望的。ここで僧侶も諦めて帰っちゃえばよかったのになーとは今でも思う」

勇者「でも僧侶は諦めなかった。俺の身体の再生と蘇生をすることにしたんだ」

勇者「と、ここで突発問題！　ここで更に面倒な問題が発生します！　それはなんでしょーか！　王様でも姫様でも、どちらが答えても構いません！」

王様「……………」

姫様「そういう気分ではございません……」

勇者「あーあ、残念。えーっと、勇者マークは……ひーふーみーよー……あー、足りてないねー。まあ後からだね」

王様「？」

姫様「？」

勇者「さて、その問題の答えとは、蘇生魔法は難易度の高い魔法だってことです」

勇者「元々、蘇生魔法を使う場合、簡易的な結界みたいなものを張って使うんだけど、ここは魔王の城な訳で」

勇者「そんなもん張ったら、一発で魔王にバレちゃう可能性が高い。つか確実にバレる」

勇者「そうだと俺の蘇生どころの話じゃないわけで」

勇者「更に、使う魔力だってべらぼうに必要で、今回はそれに高等な再生の魔法も混ぜ込まなきゃいけないときたもんで」

勇者「もうねー、奇跡でもおきない限り無理！　無理無理無理無理かたつむり！　ってぐらいの無理難題だったのよ」

姫様「ですが、勇者様がここにいらっしゃるということは」

勇者「うんそう。でも、奇跡なんて起きてないよ」

姫様「え？　でしたらつまり？」

勇者「すげえ強引な手を使ったんだあいつ」

姫様「強引な手？」

勇者「そ。だから死んだんだ」

勇者「俺が気付いたとき、辺りは一面真っ赤だった」

勇者「そんな中、身体を再生して、死んでたところを無理やり引き戻されたショックもあって、痛みや吐き気で転げまわってた」

勇者「でも嬉しかった。僧侶が必死になって蘇生させてくれたんだとわかってたから」

勇者「だから、ゲロをまき散らしながら、がくがく震えながら、それでも立って僧侶を探したんだ」

勇者「でも、僧侶は僧侶じゃなくなってた」

勇者「あたり一面に割れた回復の薬のビンや、使い終わった巻物なんかが落ちてた」

勇者「どれも魔力を回復するためのシロモノだったよ」

勇者「僧侶が何をやったのかは簡単な話だ。色んな工程を魔力で強引に押し切ったってだけ」

勇者「当然、そんなことしたら魔力なんてすぐ空っぽになるわけで」

勇者「なので、無くなるそばから薬をがぶ飲みしたり巻物で強引に回復させて、また魔法を使ってって訳」

勇者「でもなー。人の体って、限界みたいなものがあるじゃん？」

勇者「僧侶がやったのは、その許容量を遥かに越えるような事なのよ」

勇者「そして僧侶は……」

王様「魔力に耐えられず、消滅……？」

勇者「だったらマシだった」

勇者「部屋の端っこにね、もぞもぞ動くものがあつたんだ」

勇者「なんだろうー？って思って近付いてみたら、子供ぐらいの大きさのピンクの肉がもぞもぞしててな」

姫様「や……やめて……」

勇者「やめねえよ。お前らが楽しみにしてたみんなの話だ。聞けよ」

勇者「あいつなー、僧侶なー、回復魔法を垂れ流すだけの肉の塊になってたんだよ」

勇者「どっかの文献にあつたんだけど、回復魔法を延々と流し続ける石ってのがこの世にはあるらしくてさ」

勇者「僧侶は、多分それに近い物になったんだと思う」

勇者「つうか、そんな石より凄いもんになったとも言えるね」

勇者「それって一抱えぐらいあるんだけど、持ってるだけで傷が治っちゃうのよ」

勇者「そんで、持ってたら僧侶の声っていうか、意識みたいなのが流れてきた」

勇者「『食え』」

王様「は？」

姫様「え？」

勇者「だから『食べ』って言われたの」

王様「え？ いやその……」

姫様「何を……？」

勇者「僧侶だった肉を」

王様「……………」カカカカカ

勇者「だから食った」

姫様「そんな……僧侶どのの最後がそんな……」

勇者「ああ、勘違いしないでね。僧侶は俺を蘇生してる時に死んだんだよ」

姫様「でも、先ほど僧侶どののは、その、肉に」

勇者「肉は肉。あいつと一緒にするな」

姫様「す、すみません！」

勇者「とまあ、そんな訳で勇者パーティーは全滅しましたとさ。おしまい」

王様「全滅？ で、ですが勇者様は」

勇者「ああ、俺？ んー、どうなんだろ？ 今の俺って勇者って言えるのかね？」

勇者「勇者ってのはさ、人のために生きて、人の為に魔王を倒す人でしょ？」

勇者「俺はさ、肉を食った瞬間から。いや違うな。もうずーっと前から、人の為になんか戦ってなかったと思うんだ」

勇者「誰かの為に戦ってたんだとしたら、仲間の為なんだと思うよ」

勇者「そういう意味じゃ僧侶が死んだ瞬間、俺はもう勇者なんかじゃなくなってたんだと思う」

勇者「一応ね、魔王は倒したよ。そりゃねえ、常に回復しっぱなしの状態ですもん。例え即死魔法打ち込まれても死ねないとかどうなのー？って感じですよ」

勇者「あー、そうだ。もう一個、重大なことがあるんだ」

王様「一体、これ以上に何が」

勇者「そう難しいことじゃないよ。簡単簡単。僧侶の願い事なんだ」

王様「僧侶どのの願い？」

勇者「そ。願い。あいつさー、魔法使いが死んじゃった後、俺に言ったんだ」

勇者「『もう二度と、勇者も、勇者の仲間も現れない世界にしてください』って」

勇者「惚れた弱みってやつだね。俺もうんって頷いちゃったんだ」

勇者「だからその願いを叶えたい」

王様「そ、それは魔王を倒して欲しいという事では」

勇者「んー、そりゃ今の時代ってだけでしょ？」

勇者「魔王ってのはさ、例え今倒したとしても、いつかまた新しい魔王が産まれちゃう。数百年後か数千年後かはわかんないけどさ」

勇者「時代が証明してるよね」

勇者「だから俺は考えた。どうすればいいのかなーって」

勇者「そして思いついた。僧侶は魔王の出ない世界にしてくれといったわけじゃない」

勇者「勇者の現れない世界を望んだんだ」

小さな農村

魔物の老婆「はいおしまい」

魔物の少年「ニンゲンって馬鹿だねー」

魔物の少女「ねー」

魔物の老婆「はいはい、お話は終わったんだからもう寝なさい。悪いニンゲンにさらわれてしまいますよ」

魔物の少年「えー、弱っちいニンゲンぐらい大丈夫だよ。この前、2頭も仕留めたんだもん！」

魔物の少女「でもニンゲン怖いよ？ ガーって襲ってくるもん」

魔物の老婆「さっきも話したでしょう？ ニンゲンは今でこそああだけれど、昔は頭のいいニンゲンや強いニンゲンだっていたんだよ？」

魔物の少年「はいー……」

魔物の少女「おやすみおばーちゃん」

魔物の老婆「はいおやすみなさい」

魔物の老婆「ふう……最近は凶暴なニンゲンが増えてきたし、困ったものだよ……」

魔物の老婆「でも、きっとニンゲンの魔王を倒してくれる魔物がいつか……」

どこか

魔物の青年「魔王よ、何か言うことはあるか？」

「あー、二つほど」

魔物の青年「何だ」

「俺は失敗した。次は……お前の番だ」